

よし子さんがかさをすぼめようとした時、かたが強い力で後ろの方にぐいと引かれました。かたをしっかりつかんだ、ものすごく強い力でした。びっくりしてふり返ると、お母さんの手でした。よし子さんは、はっとしました。それでもお母さんは何も言わないで、よし子さんをお母さんがならんでいた



その時です。
後ろの方で、お母さんの声が聞こえたような気がしました。よその人の声も聞こえたように思いました。どしゃぶりの雨なので、よし子さんは別に気にもしませんでした。

バスが止まりました。

今日は、お母さんといっしょに、おばさんの家に出かける日です。ところが、朝から雨がふっています。よし子さんは、少しつまらなくなりました。家を出るときには、雨はいっそう強くなり、おまけに風もふいてきました。おみやげが入っている紙ぶくろにも、大つぶの雨がどんどんふりかかります。
バスの停留所では、バスを待つ人たちが、たばこ屋さんのかき下で雨宿りをしています。のかき下に入っても、雨はよし子さんの長くつや紙ぶくろにふきつきます。雨宿りをしている人たちは、バスが来る方を時々見えています。遠くの方に、小さくバスが見えました。
よし子さんは、雨の中へタッタッとかけ出すと、停留所で一番先頭になりました。バスが来たことを知った人たちは、そろそろと停留所に向かって歩き始めました。





んに知らぬふりをして、お母さんはだまっただまま、まど
の外をじっと見つめています。
いつもなら、やさしく話しかけてくれるお母さんです。
でも、今日のお母さんは、いつもとは全然ちがうのです。
そんなお母さんの横顔を見ていたよし子さんは、自分
がしたことを考え始めました。バスのまどには、大つぶ
の雨がしきりにふきつけていました。

所まで連れていきました。いつものお母さんの
顔とちがって、とてもこわい顔でした。
バスに乗る人たちの列が、動き始めました。
よし子さんは首を横に出して、ならんでいる人
の数を数えました。よし子さんは、前から六番
目でした。一人一人がかさをすばめてバスに乗
るので、いつもとちがって時間がかかりませ
ぬ。(前の人たちは、どうして早く乗ってくれない
のだろう……。)
よし子さんは、こんなことを考えながら、少
しじりじりした気持ちで前へ進みました。
バスに乗りました。でも、もう席は空いてい
ませんでした。
(ほら、ごらんささい。)
と言うつもりで、よし子さんは横に立っている
お母さんの顔を見上げました。そんなよし子さ

